

モダニティの想像におけるプチブルジョアの変遷

—鄭堅『異様な新人——新文学におけるプチブルジョアのイメージ研究』—

呉 江城

郑坚

吊诡的新人：新文学中的小资产阶级形象研究

(南昌：百花洲文艺出版社，2005)

Jiangcheng WU

1. はじめに

90年代は世界にとって大きな転換点と言えよう。旧ソ連の崩壊、冷戦の終末、グローバリゼーションの台頭などをはじめ、20世紀はようやく終止符を打たれたのである。このような時代背景の中で、中国も文化大革命の混乱から現代化の道を歩み始め、モダニズムへの追求において世界と再び同調するようになった。

近代国家を構築するという夢は20世紀の中国人にとってこの時代を貫いた巨大なテーマと考えられる。その夢に入り混じったのは「プチブルジョア」という、欧米から由来し、また、中国の近代化の過程において変質し、想像され、新しい意味合いとイメージが付与された多様な概念である。中国での登場から、プチブルジョアの表象をめぐる論争は一日絶えることもなく、憧憬と批判を浴びながら続いてきた。「五四」運動⁽¹⁾においてプチブルジョアは現代文明の代名詞であったが、20年代後期の「革命文学」論争⁽²⁾においては流動的な階級とみなされるようになり、さらに共産党政権の下で階級批判の矛先となった時期をも経て、90年代に入るとまた消費主義、ポストモダニティの代弁者と思われるようになった。文芸評論家の寇鵬程（1972～）が指摘するように、「プチブルジョア」は20世紀の中国の最も重要なキーワードの一つであり、20世紀の中国文学のコアコンセプトの一つでもある。この概念には数えきれない内包と外延の意味または中国人の幸福と苦難の記憶が含まれ、影響力の大きさは言うまでもないのである（寇，2011，p.2）。プチブルジョアの検討の重要性と価値はこの記述からもわかるだろう。

一方、プチブルジョアをどのように捉えるのかは研究者にとって難解な課題でもある。前述で述べたように、プチブルジョアは文学、社会階層、言説、思想変動、政治批判など、数多くの社会分野とかかわっており、定義の曖昧性によって「プチブルジョア」の定義も常に揺れ動いている。しかも、プチブルジョア文学、プチブルジョア知識人、プチブルジョア情調という

ようなサブコンセプトが次々と出現し、プチブルジョア研究により大きな複雑さをもたらした。

こうした研究状況の中で、新しい視野とアプローチを提供したのは鄭堅の『異様な新人——新文学におけるプチブルジョアのイメージ研究』という著作である。本書は歴史研究の視点から、中国におけるモダニティの変遷を整理しながら、新文学に現れたプチブルジョアのイメージを関連付け、プチブルジョアの背後にある中国人の近代への想像を掘り出している。また、本書は二つの手がかりによって本書の筋を貫いている。一つがプチブルジョアのイメージの創造、もう一つが「モダンな新人」^③の想像である。しかし、この二つの手がかりが離れて並行しているわけではなく、中国文学の各段階におけるプチブルジョアを表すイメージの系譜およびそのモダニズム要素という大きなテーマの枠組みで融合しつつあり、モダニティの文脈の中でプチブルジョアを研究する方法を築いているといえよう。具体的に述べると、①「五四」運動の新文学における「プチブルジョア青年」というイメージの由緒、特徴、モダンな意義、②作家茅盾（1896～1981）の小説における「現代女性」というイメージおよび中国の「女性モダニティ」の特徴、③左翼文学における「プチブルジョア革命者」というイメージおよびプチブルジョアと革命モダニティの関係、④工農兵（工業労働者、農民、兵士の略）文学におけるプチブルジョア批判、プチブルジョアのイメージ、およびプチブルジョアと革命的な民族国家政権とイデオロギーの関係、⑤90年代以来の文化界における「新プチブルジョア」のイメージおよびプチブルジョアと「改革」のイデオロギー、ポストモダニティ、消費産業の関係などが描かれる。また、本書では文学評論の枠を超え、ジェンダー、共同の想像体、ディスタクシオン、記号化、ディシプリンなどの社会学概念が導入され、より広い視野でプチブルジョアを取り巻く歴史を解き明かすような試みが見られる。

2. 著者について

本書の著者鄭堅（1972～）は中国現代文学、映像文芸、メディアと社会を研究のテーマとして、学際的な課題に関心を寄せている。

鄭堅は現在、中国湖南工業大学の文学・メディア研究科科長、教授を務めている。1999年湖南師範大学文学研究科の修士課程を卒業、2004年に復旦大学の中国文学学部にて博士号を取得した。今は中国の社会科学基金のプロジェクト「20世紀中国文学におけるプチブルジョア文学場研究」、湖南省科学技術庁のプロジェクト「湖南省のアニメ産業の発展戦略研究」、湖南省教育庁の重点研究プロジェクト「現代中国の中間階級のメディア実態と報道枠組み研究」という研究プロジェクトを担当している。現在まで、プチブルジョア、メディアおよび中間階級に関する学術論文を70本余り発表し、『異様な新人——新文学におけるプチブルジョアのイメージ研究』（2005）、『メディアが映す中間階級のイメージとアイデンティティ形成研究』（2012）の著書を出版した。そのうち、本書は学会に、中国現代の知識人の「プチブルジョア化」を考察する力作と評価された。

3. 本書の概要

本書は序を除いて全部で6章からなっている。緒論では「プチブルジョア：階級群体、政治記号および文化想像」と題され、プチブルジョアの階級的、政治的、文化的意義を全体的に叙述している。次に第一章から第四章までは時期ごとに中国文学に登場したプチブルジョアのイメージがテキスト分析のアプローチで考察されている。それぞれの題目は「第一章 『五四運動』以来の新文学におけるプチブルジョア『新青年』のイメージ」、「第二章 女性モダニティの描写：茅盾の「現代女性」創造を例に」、「第三章、左翼文学におけるプチブルジョア革命者のイメージ」、「第四章 工農兵文学におけるプチブルジョア批判とプチブルジョアのイメージ」となっている。最後の部分（余論）では、20世紀の90年代以来の文化界に現れた「小資」、いわゆる新しいプチブルジョアが今後の展開の切り口として概論されている。

3.1. プチブルジョアについて

緒論では、プチブルジョアに関する理論がヨーロッパと中国の二つの地域から整理され、20世紀の中国プチブルジョア文化界および文学におけるプチブルジョアのイメージという問題が概略的に論じられている。それは次の第一章から余論までの分析の基礎づけになる。

ヨーロッパにおいて、プチブルジョアを論じる第一人者はマルクスである。彼が『共産党宣言』においてはプチブルジョアは「反動的」と判断されたが、そこでは主にプチブルジョアの生産力における保守性が批判されるという。しかし、ロシアのレーニン時代に入ると、社会主義国家における階級批判が一気に勃発し、プチブルジョアの「幼い熱狂」という特徴がレーニンによってラベリング化され、政治的ライバルを打倒する政治闘争の記号として使われはじめた。この部分では、ロシア以外のヨーロッパ国家のプチブルジョア理論も語られているが、中国のプチブルジョア理論に影響を大いに与えたのはロシアが構築したプチブルジョアの「評論パラダイム」、「問題意識」、「言説慣習」だと著者は指摘している。

一方、中国のプチブルジョア理論は主に時系列的に共産党の発した言説によって規定されてきたことがわかる。まず、毛沢東は「中国社会各階級への分析」（1925）という論説の中で、中国のプチブルジョアを左翼、中立派、右翼とわけて、プチブルジョアを中国のプロレタリア革命の一員と位置付けた。そして、中国共産党第六回代表大会の報告書である「告全体同志書」（1928）によって、プチブルジョアとプチブルジョア意識がはじめて分けられた。次に、「延安文芸座談会の談話」（1942）という報告書で、プチブルジョアは知識人と同一視され、プチブルジョアがプロレタリア政権の純粋性を阻害するという「プチブルジョア批判」のパラダイムが確立され、70年代後期の文化大革命まで続いていたのである。

プチブルジョア理論の系譜の整理を踏まえ、著者は文学の世界に視点を移し、プチブルジョアの文学場と文学作品に出現したプチブルジョアのイメージを概論する。著者の指摘によると、中国におけるプチブルジョアの文化界とは、「五四」運動（1919）年以来、プチブルジョアのイメージ、意識、慣習についての論説、小説、文学評論、文化批評、映画映像、社説、書類、ひいてはプチブルジョア知識人の始末書などによって構築され、そして出版物、雑誌、新聞な

どのマスメディアおよび現代の学校教育システム、共産党の宣伝機関という社会システムを通して広がった文化界であるという。ここで、社会学者ブルデューの界概念が援用され、第二節でプチブルジョア文化界の相対的自立性問題も取り上げられる。また、プチブルジョア文学界は文化実体を持つ存在でありながら、諸々の叙述のなかに想像された存在でもあるという。前述したプチブルジョア文化界が現代の民族国家において「モダンな新人」を生産すると同時に、現代の民族国家の権力システムに取り締まられるという矛盾も指摘される。こうしたプチブルジョア文化界の中に誕生した文学作品におけるプチブルジョアのイメージはおおまかに六つに分けられる。それは①小ブルジョア②小知識人③都市をさすらう知識人④プチブルジョア革命者⑤時代とずれた精神的放浪者⑥プチブルジョア新人だと著者は指摘している。

3.2. 中国文学の各段階におけるプチブルジョアのイメージとモダニティ

第一章は「五四」運動前後の新文学におけるプチブルジョアのイメージに関する論述である。「五四」運動は中国の近代化における重大な意義も持つ歴史事件とみなされる。しかし、「五四」運動というと、近代民族国家の誕生、近代工業の発展、都市化のかわりに、新文化、新精神、新観念または近代化の担い手すなわち「現代人」、「新人」、「新青年」の想像、創造、生産が常に強調されると著者が主張している。また、この時期「新人」、「新青年」は後世の言説システムに従い「プチブルジョア」と関連付けられるようになったこともわかる。具体的に説明すると、「五四」運動は単なる政治事件のみならず、新聞、雑誌のメスメディアシステムと新式の学校教育に支えられ、モダンな観念とライフスタイルを広げる社会的転換と評価できる。当時、文化資本の多いプチブルジョアが学校教育および文学場の仕組みを通して、「五四」運動に必要でモダンな新人のイメージを文学作品に描き、「五四」運動を体験する人々の文化的、感情的共同体を作り出した。このような記憶と感情は後世の再確認によってプチブルジョアの五四神話を生み出したわけである。

こうした仕組みの解説を踏まえ、著者は当時の文学におけるプチブルジョアのイメージに焦点を与えている。一つの例は作家郁達夫（1896－1945）の小説『沈淪』である。『沈淪』に描かれたプチブルジョアの「新青年」イメージは感傷的で廢頹的という特徴を持つと指摘される。この感傷で廢頹な性格は実はプチブルジョアのディスタンクシオンの表れとして、小説の中でよく描かれる欧米の本名、人名、概念などがモダンな文化資本の象徴となっている。一般の読者にとって、そのモダン的なイメージは近代国家という想像にぴったり合うことになる。この時期より、プチブルジョアは想像の共同体となり始めるのである。しかし、その感傷的「新青年」に対し、もう一人の作家魯迅（1881－1936）は小説『傷逝』を通して、自分の内的世界に引きこもって社会の未来の発展に何も役に立たないプチブルジョアを風刺したことも紹介される。プチブルジョアのイメージの複雑性がこのような意見の対立でわかるだろう。

さらに、五四運動が終わった後、1927年国民党と共産党の決裂および大革命の失敗で、五四運動で作られたプチブルジョアのイメージの色が段々褪せていったという。「高等遊民」すなわち都市部での放浪者、モダニズムのディレンマに陥る青年知識人、物欲、消費、都市生活にとられる「新都会人」などのように、プチブルジョアのイメージは多様になっていく。

次に、第二章ではプチブルジョアのイメージによって五四以降の「女性モダニティ」が語られる。なぜプチブルジョアの「新女性」を一章にするかという、それは中国のモダニズムに関係があるのみならず、女性のモダニティについての体験と描写にもかかわっているからだとして著者は説明する。より詳しく説明すると、女性とモダニティの関係性の複雑さ、つまりジェンダー、知識、時代、革命、欲望、身体という要素が前述した「新人」想像に込められ、現代女性のイメージシステムが生産されたということである。

「新青年」イメージと同じく当時の中国文学における「新女性」のイメージの創造も「五四」運動を嚆矢とする。新文化、新精神、新観念を強調する「五四」運動の構造から生まれたプチブルジョア女性の最初のイメージは女性知識人である。しかし、男性のプチブルジョアとは異なり、女性知識人のプチブルジョアの特徴はまず、知識の習得によって生じる、私的空間（家）と公共空間（職業、社会）との間の身分的ディレンマというところにある。また、もう一つの特徴として、彼女たちがモダンな性愛意識を有することが指摘される。モダン性愛意識はモダニティのシンボルと著書は強調する。ところが、このような女性像は「五四」運動の終了とともに、徐々に時代の潮流とずれが拡大し主流の地位を失っていく。その後、文学に現れたのはもう一種の女性プチブルジョアイメージ、すなわち「モダンガール」と呼ばれ、都市、物欲、情欲、消費、快楽主義というイデオロギーに満ちている女性グループである。さらにこのような「モダンガール」が社会革命の風潮に乗り、ボルシェビキ戦士へと変身する様子が常に丁玲（1904－1986）などの作家の作品に現れる。

第一章では、プチブルジョアのディスタンスが紹介されたが、第二章では作家茅盾の小説によく登場し、女性プチブルジョアを中心とした社交的サロンなどの言説の場も語られる。しかし、この言説の場はただプチブルジョアの話し方や知識システムをシェアする空間にすぎなく、プチブルジョアの根底にある「時代への参加」という欲望を満たせないと著者は論ずる。

その後、作家茅盾の『蝕』、『虹』、『創造』などの作品のテキスト分析によって、著者は「恋愛＋革命」という叙述のパターンで描かれる「時代女性」、「革命女神」を説明する。「恋愛＋革命」とは、女性の身体を革命の反対の立場に据え、女性の官能的な身体を克服するという、時代と革命の理想の純粋性をつけるという手法である。実際、「恋愛＋革命」という小説のパターンは次の第三章でもさらに説明される。

次の第三章になると、20年代の後期に、中国文学は後期創造社、太陽社、「左翼連盟」などの作家グループの活躍をはじめ、「プロレタリア文学」、「恋愛＋革命」小説、「左翼文学」が文壇で輝いた時代となる。この時期のプチブルジョアの文学イメージは新しい新人の想像によって転換期を迎えた。「五四」文学にけるプチブルジョアのイメージ創造は新文化に重点がおかれたが、プロレタリア文学から、それは政治的、社会的、歴史的な主体として想像されはじめ、ボルシェビキ革命者の性格が与えられる。

プチブルジョアのイメージのボルシェビキ化において、文学作品は重要な役割を果たしていたと著者は述べる。注目すべきなのは当時、旧ソ連、日本から中国の文壇に伝来し、成功を収めた「新写実主義」という文学の潮流である。「新写実主義」革命文学の特徴として、革命のモチベーションを刺激し、将来の革命の成功を予言するということが述べられる。このイデオロ

ギーは左翼作家に大きな希望を与えながら、「五四」運動に誕生し、感傷的で悲観的なプチブルジョア「新青年」を批判する武器ともなる。

このような批判を受け、プチブルジョア作家はプチブルジョア革命者のイメージを作り出すわけである。そのイメージの想像と創造は4つの段階を経るという。最初段階では「五四」文学における「新青年」のイメージと大きく異なっていないが、ストーリーの最後に革命が彼らの新生の可能性とみなされる。発展段階では、プチブルジョア革命者が「革命」と「恋愛」の両立に苦悩したという記述が多い。次の段階では、プチブルジョアの気質と性格は革命者の風格と生活様式に変えられ、大胆かつ純粋なボルシェビキ英雄が多く描かれる。最後の段階で、そのボルシェビキ英雄が新たな歴史環境の中で「人民」によってプチブルジョアに還元され、批判される。

プチブルジョアイメージのボルシェビキ化にはもう一つの原因がある。それは、レーニン主義とスターリン主義が放浪するプチブルジョア新青年に国家建設、社会変革に参加するチャンスを提供するからであると著者は考える。つまり、ボルシェビキ化されたプチブルジョアがプロレタリアと農民階級を率いて旧ソ連式の国家政権を築くというようなモダニズムを実現するチャンスである。こうすると、彼らは社会の放浪者から未来の現代国家の先駆者に昇格するだろうという希望が見出される。

最後に、第四章では「延安⁴⁾時期」から「文化大革命」にかけて、共産党政権の下にプチブルジョア批判の形成と仕組みが論じられる。この時期において、毛沢東式のモダニズムが主流となる。毛沢東式のモダニズムの核心は理想主義、浪漫主義、人民主義、ユートピア的な究極の現代社会および現代「新人」の想像にあるという。このイデオロギーに基づき、国家政権による「新人」の創造が党の宣伝機関、国の教育システム、文化管理機関の支えですべての国民によって行われる。この時期の「新人」は「工農兵」、「無産階級戦士」、「農民英雄」、「新英雄」、「共産主義戦士」、「文化大革命戦士」、「毛沢東主席の偉大な戦士」などとみなされている。

一方、「五四」運動以来、「新人」の想像の対象であるプチブルジョアは—「五四」時期の「新青年」であれ、左翼作家時期のボルシェビキ革命者であれ—国家政権が作った「新人」の反対側に立っているので、批判をさんざん浴びさせられる。結果として、国家政権は、斬新な階級関係、審美様式、ライフスタイルを構築するために、文化的ヘゲモニーを握ったことができると著者は論じる。

一方、プチブルジョア自身には分裂したモダニティ性格があるという。前述のように、彼らは自分を革命の先駆者と想像し、中国におけるモダニティの実現への使命感を有しながらも、「五四」運動の精神遺産、教育背景、都市生活の履歴が「プチブルジョア気質」というモダニティの感覚を形成する。そのため、国家政権により作られる集団主義的、共産主義的な「新人」とは相いれない立場で、批判をさらに受けることになる。この状況の中で、プチブルジョアは二つの「新人」イメージを文学作品に作り、新政権への帰属を表明する。一つは「プチブルジョア新人」と名付けられたものである。例はプチブルジョア作家丁玲の『太陽は桑乾河を照す』という作品である。この作品はプチブルジョア式の書き方が完全に放棄され、「毛沢東式」の文章で描かれる。もう一つは革命歴史小説におけるプチブルジョア新英雄のイメージである。例

として、『青春の歌』、『三家巷』などがあげられる。これらの作品は主に、プチブルジョア出身の主人公が国家、人民の英雄へと変化するという成長史を記述するもの物語である。革命歴史小説は、「五四」時代の「新青年」、「左翼」時代のボルシェビキ化したプチブルジョアおよび延安時期以来の「新人物」を貫く「新人」の想像をプチブルジョアの地位の変遷とつなげるとのことである。

3.3. 新プチブルジョア研究への可能性

本書の最後の部分では、20 世紀 90 年代以降の「小資」^⑤を検討する可能性を提示する。この時期の「小資」はそれまでのプチブルジョアとはかなり異なる概念で、グローバリゼーション、市場経済化、都市化の背景の中で作り出される、ポストモダンなイメージである。二つの概念はともに「想像され」、「創造され」、「生産される」ものである。しかし、過去のプチブルジョアは革命的なイデオロギーおよび言説によるものであるのに対し、90 年代の「小資」は都市の大衆的なファッション産業の中で作られるのである。ファッション誌、文化雑誌、インターネット、「小資」ハンドブック、新聞、「小資」文学などの媒体によって消費行為を美学とみなす消費主義というイデオロギーを持つ「小資」のイメージが創造される。また、現代化の道を歩んだ 90 年代の中国社会の激変を受けて、都市部のサラリーマンを階級基盤とした「小資」たちは「小資情調」、「小資文学」などの文化的好みを象徴的なシンボルにし内部的ディスタンスを形成するという特徴が生じる。

「小資」の流行りに対し、一部分の伝統的な知識人が批判的眼差しを注いだが、その前のプチブルジョア批判とは異なり、今回の批判は「小資」の消費中心というイデオロギーに焦点が当たることになる。緒論で述べたプチブルジョアのイメージの一つ「都市をさすらう知識人」は 90 年代の「小資」と類似性がある。この二つのイメージはともに消費中心で、都市に依拠し生きるということが指摘される。そのため、著者は、上海などの大都市に基づくモダニズムの表現としての文化的ディスタンスと階層に基づくイメージがまさに、「小資文学」の特徴であると主張している。

しかし、この部分にはいくつかの問題が残されている。なぜ 21 世紀の始めに「小資」は再び文化界の焦点となったか、20 世紀 90 年代にどのような「小資」が生産されたか、彼らにどんなモダンな特徴があったかという問いはこれからの新プチブルジョア研究の課題になると著者は考えている。

4. 考察

プチブルジョアは中国の近代史において非常に研究価値のある課題とされるが、系統的で深入りのある研究はなかなか見られないとはきわめて残念なことである。本書は中国のプチブルジョア研究の画期的な著作として、高く評価されることになっている。

本書の特色として、「1.はじめに」で述べられたように、本書には二つの手がかり—プチブル

ジョアのイメージの創造および「モダンな新人」の想像—があるという点に特筆を加えたい。二つの手がかりを基に文書を書くことを普通に考えてみれば、論文の骨がばらばらになる恐れがあると思いがちであるが、著者は巧妙にモダニティというテーマで二つの手がかりをつなげており、プチブルジョアのイメージ創造の線と「モダンな新人」想像の線を交織させ、著書の粗筋を築いたわけである。例として、第一章における「五四」運動時期のプチブルジョアと「新青年」の分析があげられる。当時、中国は近代化を模索していた時期にあり、近代化に対し漠然とした想像しか思いつけられなかった。この大きなテーマは本章の最初に描かれる。このテーマの下に二つの線が叙述され、融合される。知識人は、国家の現代化の肝心要は新青年、新人の創造というところにあると思いつつ、新文化を生産と伝達する主役も「新青年」に任せただけである。この新人の創造に対し、新式の教育と西洋、日本の文化資本を多く受けたプチブルジョアは「五四」の学校物語を通して、西洋的な憂鬱さに満ちながら自由、知識を追求する文学人物のイメージを作り出し、「新青年」の想像の穴を埋めるのである。これにより、二つの線が一つのテーマになり、全体としての論述がかえって明白に把握できるという効果が評価できる。

また、プチブルジョアのイメージを文学作品の枠組みを超えてモダニティの視点から考察する側面もかなり斬新で高く評価したい。文学作品は作家の個人的な考えの集合だけではなく、歴史、社会の産物でもあり、歴史、社会の実態を研究する良い資料にもなるのである。社会学者リュシアン・ゴールドマンは「有意義的構造」という概念を通じて文学と社会、歴史の本質的な関係を明らかにしようとする試み（Goldman 訳書, 1989, p.47）を行ったように、文学作品を歴史、社会研究に用いる可能性があるということがわかった。本書はそういう可能性に挑む重要な模索であろう。中国におけるプチブルジョアは文学作品によく描かれるが、こういった文学作品を違う段階に分けて、モダニティとの関連付けという歴史的なアプローチからプチブルジョアのイメージの変遷を整理するのは、文学研究を社会的、歴史的な視野で深めていく好例といえよう。

さらに、本書のオリジナリティという点では、プチブルジョアの文化界およびプチブルジョアのディスタンクシオンという概念が初めて築かれることが注目に値する。最初の緒論ではプチブルジョアの文化界およびその自立性問題が検討される。従来のプチブルジョア研究によく見られる歴史分析、文学分析の視点と比べ、プチブルジョアの文化界の導入が学際的な醍醐味を示してくれるのではないかと。つまり、これにより、社会学的なプチブルジョア研究の可能性が提示されることになる。

他方、本書にはより深い検討を入れるべきところが存在する。まずは、各時期のプチブルジョアに対する研究のバランスがよく取れていないということである。例えば、「延安」時期から「文化大革命」までの論述にあたって、著者は単に一つの章の中に考察するが、文化大革命を一つの章として検討したほうが適切だと思える。寇鹏程（2012）の指摘によると、文化大革命前の文学は「17年文学」という時期で、文化大革命時期の文学とは断然に違うという。この時期のより細分化により、プチブルジョアのイメージとその後の90年代のプチブルジョアのイメージとのつながりが一層明らかに捉えられるだろう。また、第二章で女性プチブルジョアに

関する検討は第三章の考察と重なるところが多いことが否めない。「恋愛＋革命」小説のパタンは女性プチブルジョアに限っているわけではなく、第三章で論じられたプチブルジョア革命者に至っても当てはまるのである。女性モダニティというと、自分の身体への克服のみならず、いかに男性の眼差しを克服し、自立する女性像を確立させるかについての考察が加われれば、第三章との重なりを避けることができるだろう。最後に、文化界の分析にあたっては、プチブルジョア文学という目標に力を入れすぎて文化教育システム、マスメディア、政府（党）の文化管理機関の動きに関する論述が足りないというところも感じられる。

最後に、本書の大きなテーマとしてのモダニティに関して、今後の研究方向が提示されるということを書き加えたい。国や知識人の想像に存在する「五四」時期のモダニティと文化大革命時期のモダニティとは大きな違いがあるので、文学のプチブルジョアのイメージおよび彼らに対する評価もかなり違っており、「モダンな新人」を担当する使命が徐々にプチブルジョアから解かされていった。20世紀90年代の中国の都市部に登場した「小資」はその前のプチブルジョアとは全く異なるのが、モダニティの想像の没落につながるのだろうか。それはさらなる検討が必要とされる。

〈注〉

- (1) 1919年5月4日、北京大学の学生を中心に行われた反日街頭行動に端を発し、全国的な規模に拡大した日本帝国主義反対運動。通常、この運動に伴って進展した文化的改革（新文化運動）をも含める。15年袁世凱政權に「二十一カ条要求」を受諾させた日本は、中国侵略に拍車をかけていった。その頃、中国の青年たちは、ヨーロッパから流入してきた思想を媒介に、文化的改革を行なっていった。特に、陳独秀、魯迅、胡適、李大しょうらを中心にした『新青年』（1915年9月上海で創刊）はその推進母体となり、口語（白話）文使用を提唱した（魯迅の『狂人日記』など）。また、北京大学では、新思想を研究、啓蒙する多くのサークルも生れた。このような状況を背景に、17年のロシア革命に触発された学生、労働者は、19年パリ講和会議で列強が山東半島における日本の主張を擁護する側にまわったことに憤激し、5月4日北京大学の学生デモを皮切りに反日運動を全国的に展開していった。それはやがて日本製品ボイコット運動、工場のストライキへと発展した。6月、ついに北京政府は講和条約調印拒否、親日政治家罷免を発表し、運動は一応終結した。しかしこの運動は各地で組織的な運動として引継がれ、中国人の民族意識に初めて明確な方向を与えた。
- (2) 1925年の五・三〇事件を契機として、革命運動が再び高揚期を迎えると、〈文学革命から革命文学へ〉というスローガンが創造社グループによって提起され、やがてそれは20年代末にはプロレタリア文学運動となって展開した。革命文学をめぐるのは、創造社や太陽社の若い文学者と魯迅などとの間で一時期激しい論戦が交わされたが、それは同時に論戦を通じて、両者がそれぞれに外来のマルクス主義文芸理論を消化、吸収していく過程でもあった。
- (3) 「五四」運動から中国の近代化が開幕したが、近代化を率いる新しい国民像の想像が重要

になり、諸々の「新人」、「新国民」が文学作品、評論などに現れた。そうした想像の始まりは『新青年』雑誌の創刊である。1913 - 15年、陳煥章、康有為ら保守派の学者の音頭によって、孔子の教えを国教にしようとする孔教運動がおこり、袁世凱の帝制がさげられるなかで、新文化運動が開始される。「民主と科学」を旗じるしとする雑誌『新青年』を中心に、中国の社会と文化を改革するためには、中国の封建体制の基礎となっている家族制度とそれを支えてきた孔子の教え(儒教)を否定せねばならぬ、という認識が進歩的知識人の共通のものとなった。

- (4) 中国陝西省北部の都市。古くから渭水盆地とオルドスを結ぶ軍事上の要地。1935年から中国共産党の抗日・解放運動の根拠地とされた。1949年以降、共産党政権により革命の聖地とみなされた。
- (5) プチブルジョアの中国語「小資産階級」の略語。

〈文献〉

- Anthony Giddens, 1990, *The Consequences of Modernity*, Stanford University Press. (= 1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』而立書房).
- Benedict Richard O'Gorman Anderson, 2006, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso. (=2007, 白石隆・白石さや訳『定本想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山).
- Goldmann Lucien, 1964, *Towards a Sociology of the Novel*, Trans, 1975, Alan Sheridan. New York: Tavistock Publications. (=1989, 段毅・牛宏宝訳『文艺社会学方法論』工人出版社).
- 石井洋二郎, 1993, 『差異と欲望——ブルデュー「ディスタンクシオン」を読む』藤原書店.
- 胡军, 008, 「对『历史的历史性问题』的追问: 评郑坚『吊诡的新人——新文学中的小资产阶级形象研究』」『湖南工业大学学报』, 13(1).
- 寇鹏程, 2012, 『中国「小资产阶级」文艺的罪与罚』上海三联书店.
- 李卓, 2014, 「『小资产阶级』考论(1900s-1950s): 中国现代文学批评政治化管窥」. 暨南大学.
- 中村高康, 2014, 「後期近代の理論と教育社会学 A. Giddens のハイ・モダニティ論を中心として」『教育社会学研究』, 94(0), pp.45-64.
- 卫华, 2006, 「新文学小资形象的开拓性研究: 评郑坚『吊诡的新人——新文学中的小资产阶级形象研究』」『株洲师范高等专科学校学报』, 11(3).